特別支援教育課便り　教職員・幼児児童生徒・保護者を応援します！

サポート

NO.１４１号
平成２９年５月２３日発行
秋田県教育庁特別支援教育課　指導班

特別支援教育支援員研修会

特別な支援を必要としている児童生徒の支援のために、今年度、県内の小学校、中学校合わせて７１７名の特別支援教育支援員が配置されています。

４月下旬から５月上旬にかけて、県内３地区において実施した研修会には、県北１７９名、県央１０１名、県南１７３名が参加しました。

研修会では、経験年数別に分かれての講義・演習と対象障害ごとに分かれてのグループ別協議を行いました。

【講義・演習の内容】

対　象	研修Ａ（１、２年目対象）	研修Ｂ（３年目以上）
テーマ	「特別支援教育支援員の役割と支援の基礎」	「児童生徒の自立を目指した支援の具体」
内　容	○支援員の役割 ○子どもの困難さの理解 ○具体的な支援の仕方 ○子どもに伝わる言葉がけ ○先輩支援員の工夫　　など	○支援と自立の関係 ○学級担任との連携の仕方 ○障害特性の理解と対応例 ○合理的配慮の例 ○ケース別対応の演習　など ※地区によって若干内容が異なります。

【グループ別協議】

対象障害別に４～７人のグループに分かれ協議を行いました、対象児童生徒の障害等の状況と支援上の課題、具体的な支援内容と成果、特別支援教育コーディネーターや学級担任、保護者と連携した支援内容について、各自持参した資料を基に紹介し合う形で進めました。経験１、２年目の支援員から出された課題や悩みについて、経験豊かな支援員が、自身の経験に基づく効果的な支援方法を紹介するなど、活発に意見交換をする様子が見られました。特に、中学校のグループでは、卒業後の進路を見据え、「どこまで」「どれくらい」支援すれば良いかということについて、熱心に協議するグループが多く見受けられました。

【受講者の感想より】

・普段から必要のない支援をしていないか、支援を減らす工夫をしているか、自分の支援を考え直す機会となった。
・担任の先生方との情報交換、情報共有が大事だと思った。
・生徒が離席したり叫んだりしたとき、叱責ばかりだったと反省した。原因は何か考えることを忘れていたと感じた。
・支援を受けた子どもたちが、成長してどのように社会に巣立っていくのか知りたいと思った。
・経験豊富な支援員の方々から、体験に基づいたアドバイスや支援のアイディアをいただき、ありがたかった。
・コーディネーターが中心となって学校や職員が共通の取組をしている学校では、支援員の役割分担や支援の範囲が明確になっていると感じた。
・コーディネーターを中心とした取組の実践例を紹介して欲しい。

研 修 報 告

「平成２８年度視覚障害生活訓練等指導者養成研修を終えて」

視覚支援学校　教諭　佐藤　友紀子

昨年度、１年間という長い期間に渡り、日本ライトハウスでの研修の機会をいただきました。視覚支援教育についてまだまだ未熟な自分が、このような研修の対象として選ばれたときには、申し訳ない思いと肩身の狭い気持ちで一杯でした。しかし、修了後素直に思うことは、「研修に行ってよかった」ということです。歩行指導員、生活訓練等指導員としての専門性を学ぶことができたことは勿論のこと、全国各地から参加した受講生との出会いは、職種は違いますが、仕事に対する様々な考え方に触れる機会となりました。また、関西というこれまで経験したことのない地域での生活は、その土地の人柄や文化に触れる機会となり、見聞を広めることができました。今回の研修では、たくさんのことを学ばせていただきましたが、特に印象の強い内容について紹介します。

まず、Ｉ期の研修のメインである、歩行訓練です。そこで気付いた私の課題は、「メリハリ」です。声の抑揚や言葉掛けのタイミングの工夫で、活動のポイントを印象付けることができます。視覚障害者の歩行では、視覚以外の様々な感覚が活用されており、その一つである運動感覚の改善には、即時強化が有効です。タイミングを捉えた的確な言葉掛けがメリハリのある指導と考えます。

次に、実際の現場で、日課に沿って利用者の方と一緒に活動したことです。視覚障害の他に知的障害や精神障害を併せ有する方、高齢の方など幅広い個性に接し、驚きや戸惑いもありましたが、相手の思いややろうとしていることを察する、明るく朗らかに接するという点を意識して関わりました。自分の名前を伝えてから手引きをしたり、「こそあど」ではなく、具体的に伝えたりすることが、これまでより自然にできるようになりました。また、どの活動においても、対象者に考えさせる場面があり、自ら課題解決できるよう、指導者がアドバイスしたり、ヒントとなる言葉掛けをしたりし、本人の意欲を大切に支援していることを感じました。

そして、Ⅱ期の研修での基礎実習を通して、事前準備の大切さを改めて感じました。自分なりに考え、実践し、評価・改善する積み重ねが、指導力の向上にも繋がったと捉えています。活動の意図を明確にし、対象者の課題に対する習得段階を考慮した、代替手段の工夫をたくさんもっていることは、指導場面において強みになります。受講生同士での学び合いは、自分にない発想に気付かされたり、視覚障害者の日常生活での困難やニーズの想像を膨らませてくれたりしました。

今年度が始まり２か月近くが経ちましたが、早速研修で学んだことを実践に生かす機会をいただいています。まだまだ手探りではありますが、視野を広くもち、様々な視点から物事を考察し、専門性を深めていきたいと考えています。

五十嵐校長先生と修了証書を手に